

演習林産木材価格の変動と今後の対応策について

松元正美
(農学部附属演習林)

はじめに

ひと昔前まで、林業経営者にとって森は宝の山であり、木は文字通り「金のなる木」だった。それがいまや外材との競争により下降する市場価格と、森林での作業に要する人件費、製材・加工、流通などの諸々のコストとのつりあいがとれなくなり、森はお荷物であり、手入れもされずに放置されるようになった。森は儲からない、だから何のうまみもないというわけだ。たった数十年の間に森林の価格は大きく変動したようである。演習林でも、毎年収入源として皆伐作業や間伐作業などにより主にスギ、ヒノキを生産しているが、近年の長びく不況の中、木材価格の低迷には演習林のみならず林業経営者にしても悩まされているのが現状である。

今回の報告は、木材価格が実際にどれほどの変化があったかを、高隈演習林における昭和61年度から平成15年度までに生産されたスギ、ヒノキの県森連高山共販所および単人共販所での1m³当たりの素材（丸太）販売価格の変動をもとに、これからの林業経営について検討してみたい。

木材価格の推移

演習林産素材の1m³当たりの年平均価格を昭和61年から平成15年度まで調査してみると、平成7年度までは1m³当たり2万円前後で推移していたが、8年度からは価格の下落が続き平成13年度には約1万円前後まで下落して現在まで横這い状態が続いている。はたしてこの状態はいつまで続くのか演習林としても、林業経営者、市場関係者としても気になるところである。

木材価格低迷の要因

市場での木材価格低迷の要因をいくつか検討してみた

①木材需要量の減少

日本での木材需要は、昭和30年代以降、高度経済成長を背景とした建築用の製材、紙・板紙生産用のパルプ材等の産業用が急激に増加したが、近年のわが国の経済成長が低成長であり、その影響のひとつとして、これまで丸太を加工した製材用材の需要量の7割を占めてきた住宅建築用材にしても住宅着工数の減少をうけ、製材用材の流通にも大きく関わっているのではないかと思われる。また、パルプ・チップ用材にしてもそのほとんどを紙の原料として使用されてきたが、近年のリサイクル運動による古紙再生の進展によって減少したと思われる。

②林業労働者の賃金の上昇

林業統計白書の「スギ1m³で雇用できる伐木作業員数の推移」では、昭和30年代と平成13年度では1m³当たりで雇用できる作業員数は約20分の1に、また、一日当たりの木材伐出業賃金は約16倍の差となっている。

③外材の輸入

近年木材は海を渡ってくると言われているが、国内で生産される木材に比べ価格の安い外材の輸入の増加により、国産材普及の低迷の要因になっていると思われる。日本での木材総需要量から見た国内自給率は平成13年度では20%（：林野庁「木材需給表」）となっており、いかに日本の木材供給が外材に依存している割合が

多いかがえる。

④製材コストの増加

一般的に立木が製材品になるまでの過程は、林業事業体等による丸太の生産と原木市場への出荷、製材工場での製材品への加工と製品市場への出荷というように、多段階になっているが、この中での丸太を製材品にするときの製材コストの増加、すなわち人件費の上昇により丸太購買力を低下させているのではないか。

対応策

今後このような状態がいつまで続くのかわからないが、現在の価格低迷を乗りきるにはどのような手段があるか検討してみた。

①高性能林業機械導入による生産コストの削減

近年林業家ではグラップル・プロセッサ等の機械を導入し、作業労力、効率の削減をはかってきているが、機械そのものが大型で価格が高く小規模な林業家では導入できないのが現状である。今後は、小型で低価格の高性能林業機械の開発、改良等を進めその導入を促進する必要がある。機械作業をより効率的に進め生産性の向上を図るためには、作業条件に応じた複数の機械の組み合わせや作業方法により、機械の能力を十分に発揮させることが重要ではないか。

②生産材の品質の向上と良質材の生産

木材に対する需要はその木材がどのように管理・生産されたのか、またその材の強度・耐震性の面ではどうかなど、品質・性能が明確な製品に切り替わりつつあり、これに対応できない国産材は、木材市場における地位を低下させている。このためにも良質材の生産を植え付け時から検討し、下刈り、除伐、蔓切り、切り捨て間伐、枝打ち等の作業を計画的におこなって森林を管理し通直で無節の材を育成することが重要ではないか、また近年では現代的な工法の住宅では寸法安定度が重要視されており、製材品の乾燥が不可欠となってきている。しかし、わが国では人工乾燥材の普及は少ないのが現状であり、今後は山床での葉枯らしによる材の生産に重点を置いてはどうか。

③搬出時期・採材方法

いくら良質な木を育てても、その木を有効に採材するかで同じ一本の立木からとれる金額が違ってくる、その時期の市場の相場を知り、どのような径級と長級がよく取引されているかを市場関係者と連絡をとりながら搬出するのが望ましいのではないか。

おわりに

今後も林業をとりまく環境は厳しい状況にあると思われる。演習林は教育研究施設であり、これまで収入のことにはそれほどこだわっていなかったが、今後、法人化にあたって自己収入を安定的に確保することは重要であり、上記のようなことを考慮しつつ森林施業に取り組まなければならないと思われる。